

ブレイクの

マージネリアについて

小泉 一郎

十歳から十四歳にいたる四年間、パースの畫塾に學んだときと、續いて十四歳から二十一歳まで六年間彫版師バザイアの門にあつたときと——ブレイクがその生涯において教育らしい教育を受けたのはこの十年間だけである。「有難いことに、自分は學校へやられて鞭でうたれ、馬鹿者の流儀に従はせられたことがない」とブレイク自身は書いてゐるが、とにかく、正規の教育を受けることがなかつたといふ事實から、彼の思想の偏向が生れたことは否定できない。

ミルトン、シェイクスピアには早くから親しみ、長じてからはヤコブ・ベーム、スウェデンボルグ、舊約のイザヤ書を愛讀した。そのほかにも彼の讀書は廣範にわたつてゐたことが推測されてゐるが、さうした讀書を通じて、彼はただおのれの生得の氣質に合ふもののみを受け入れ、それ以外のものを排除するといふ態度をとつた。二つ以上の物

の見方が存在することを彼は信じなかつた。頑固にただひとつの見方に執して、おのが孤獨をひたむきに深めてゆくのが彼の生き方だつた。

「私は他人の賞讃はもう澤山だ。ひたすら進んでゆく私をさへぎりとどめるものは何ひとつない。私は腰をおろして高らかに叫ぶ、私、私と。」彼はまた、「精神界の帝王ウィリアム・ブレイク」と自負した。生涯を通じて egoist だつたブレイクは、みづからそれを意識しなかつただけにそれだけ完璧な egoist だつたといへよう。彼は自分がつくりあげた獨自の世界に住み、他人がこの世界を侵害すると、はげしく怒つた。このやうな獨自な、せまい世界に住むブレイクといふ孤獨な精神が、讀書といふ手段を通じて他の精神といかに觸れあつたかを如實に見せてくれるのが彼のマージネリア（傍註）である。

彼はつねに眞劍に生きた。その讀書も、單なる放肆な知的興味に發するよりも、對象との命がけの格闘だつたことは特記してよいと思ふ。小宮豐隆氏が漱石の讀書について述べてをられる言葉を借りれば、それは「眞劍勝負」だつた。全身全靈をあげて作者にぶつかり、會心の句に出あへば歡喜の叫び聲をあげ、反撥する句に出あへばはげしい怒りをたたきつける。さうした精一杯な物の言ひ方が彼の傍

註を一貫する特徴といへる。現代の讀書人が忘れてしまつた讀書法である。

ジェフリ・ケインズの編纂した「ブレイク全集」(一九三二年版)に收められてゐるブレイクのマージネリアは全部で十一あるが、その中で特に分量の多いのは、ラファーターの「人間に關する箴言集」とレノルズ卿の「講話集」とにブレイクが書きこんだ傍註である。前者は彼が最も共鳴を覺えた書であり、後者は彼が最も反撥した書である。その意味で、前者は positive に、後者は negative に、それぞれブレイク自身の思想の核心を明らかにしてゐるのは興味深い。紙面が限られてゐるので、いまはたゞラファーターへの傍註によつて彼の精神の若干の問題をとらへて考察したい。

ヨハン・カスパル・ラファーター(一七四一—一八〇二)はチューリッヒに生れた詩人であり神學者であり人相學者であり神秘主義者だつた。その「人間に關する箴言集」へのブレイクの傍註は一七八八年に書かれたが、これは、その翌年一七九〇年に書かれたスヴェデンボルグの「聖智と聖愛に關する天使の叢智」と、おなじく「神意に關する天使の叢智」とへの傍註とならんで、ブレイクが一七九三年に出版した「天國と地獄の結婚」の中心思想へ發展すべき

萌芽を含んでゐる點で注目すべきものである。

この「箴言集」に彼がどんなに深い共鳴を感じたかは、次のやうな傍註で明らかであらう。「かくも私が愛し、かくも私がよしとしてゐる書。」「この書は見事に書かれてゐる故に善き靈と語りあつて書かれたものであること、ラファーターといふ名は人の心を淨める者たちの護符であることを私は言ひたい。」

この書への傍註に見られる特徴は、まづ、正々堂々とした、たくましい生き方に對する讚美である。

ラ(屢々哄笑は不實の心を示すしと呼ばれ、反面邪心のない靜かな微笑は高貴な心のしるしとほめそやされて來た。が、人の心をそこなふのを戦々兢兢として恐れ、内なる品性をいやしめるのを恐れてみづから哄笑せず、他人を哄笑せしめないときは、たくましい心をもつ多くの人間の知らざるところである。)

ブ「自分は乏しい微笑を憎む。自分は哄笑を愛する。冷笑者共は地獄におちよ。」

ラ(語るまゝを書き、書くまゝを語り、語りまた書くまゝを顔に表はす人——それが正直者だ。…冷笑の習慣はエゴイストの、馬鹿者の、もしくは惡黨のしるしである。)

ブ「三者全部だ。…自分は高貴豁達を欲する。」

ラ「人は正直であればあるだけ聖者の風をよそほはぬものである。聖者ぶるのは吹出もののやうに信仰の面を汚す。

…不愉快な眞實を大膽に語りうる人は、ぶつぶつ呟く人間よりも大膽且つ柔和である。」

ブ「至言！ 呟く奴等は地獄へおちよ。…俺は地面を匍ひまはる者共を侮蔑する。」

「天獄と地獄の結婚」の中の「地獄の箴言」で、「勇氣に弱い者は狡智に強い」と言つたブレイクの姿をこれらの傍註の中に認めても恐らく誤つてはゐないであらう。「友情は私の心を痛ましめることが多かつた。友情のために私の敵になつてくれ」とうたひ、「敵對こそ眞の友情である」と叫んだ彼の、むきだしな眞實追求の精神はここにもはつきりとみられる。

だから彼は、(たけり狂ふ激情よりも落ちつき拂つた奸惡のにやにや笑ひを恐れよ)と、ラファーターが書いたとき、「至言！」と叫び、(熱い愛情か深い嫌惡の機會に遭遇するまではお前の態度を決するな)といふ言葉に對しては「まことの體驗だ」と書いてゐる。狂暴な激情の奔騰の中にみられる生命の高貴こそ彼にとつてこよなきものであつた。「孔雀の驕傲は神の榮光。」「獅子の激怒は神の智慧。」

「怒る虎は訓練された馬よりも賢い。」——「地獄の箴言」の中のこれらの言葉はブレイクの飽くまで積極的な生命主義を表現してゐる。この傍註の中でも、(逞しい力を外に表はさず弱々しい様子を示し、派手な惡事をしようとするよりも美德を好む者こそ善良な人間である)と言ふラファーターに對しては、眼を射るやうな言葉を放つてゐる——「高貴！ だが注意せよ、積極的な惡は消極的な善にまさるのだ。」これはそのまゝまづすぐに「地獄の箴言」の中の「實行されぬ欲望をはぐくむよりは、いつそゆりかごのみどり兒を殺せ」といふ言葉に通じてゐる。いはゆる善や惡の彼岸の生命力の世界が、彼にとつては至高の歡喜の世界なのである。

(人間の感興に應じて神も感興する。神の思ひはそのまま人間の思ひである。…人間的なものをあがめないものが、どんな自然をあがめるといふのか。人間の中に求められるべき神を求めて書物をかき探し、または天上の星の間をさまよふ勿れ。)こんなラファーターの言葉はまたブレイクに最も強く訴へたらしく、「全金！」「人間性はそのまゝ神の姿である。」と註してゐる。「人間のゐないところ、自然は索莫としてゐる。…神のみが多産なのではないかと言ふ者があるなら、自分はあへて答へよう。神は生存するも

の即ち人間においてのみ存在し且つ行爲する、と。」(「天國と地獄の結婚」の神人同視説や、後年の「永遠の福音」において彼がイエスに語らせてゐる言葉「汝が我に對してへりくだるのは我を卑しめることだ。汝も亦永遠の世界に住む者なのだ。汝は人間、神は汝に他ならない。汝みづからの人間性をあがめよ、人間こそはわが命の靈なれば。」は、この傍註に胚胎してゐると言つてもよからう。

さらに、この傍註に鮮明にみられるのはブレイクの個人主義である。(人が夫々その本質において異なるのは、恰も形や四肢や感覺が異なるのにひとしいといふ)ラファーターの言葉は、ブレイクにとつては、一切の抽象論をはるかに超えた眞の基督教的哲理と思はれた。「薔薇からその赤さを百合からその白さを、金剛石からその堅さを取り去り、自然界の一切のものを哲學者がやるやうに修正してみよ。さうすればただ渾沌の姿が現はれるだらう。」一切のものがその獨自の特質と生き方とを徹底的に推し進めながら、互ひに寛恕しあふとき生れて来る秩序——それがブレイクの考へる基督教的倫理の世界なのである。「各人の主要な性向はその主要な美德、その守護神と稱すべきである。各々の物はそれ自らの原因であり結果である。悪徳とはおのれの行爲を等閑にし、他人の行爲を阻むことだ。これに反

し、すべての行爲が美德だ。…およそ否定的なものはすべて悪である。」

彼の個人主義は「天國と地獄との結婚」における「獅子と牡牛に同じ掟をもちだすのは暴壓だ」といふ言葉に示される、専ら反逆の姿勢をとつた時代から、後年の自我絶滅を強調した豫言書「ミルトン」(「各人の叡智はその人間自身の個性に特有のものである」)時代まで、一貫して變らない。

チョーサーに關する卓拔な文章をのぞいては他人の著述についてまとまつた批評を全く筆にしなかつたブレイクの批評的眼識といふものを、われわれは彼のマージネリアを通して窺ふことができる。そこに見られる批評家ブレイクは、同情のひろやかな、綿密な讀者ではないが、鋭い分析力と要點を突嗟に捉へる直觀力の所有者だつたことを充分に證明してゐる。

ブレイクはフランス語、ラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語まで獨習しようと試みたが、この場合にも、言葉と格闘してそれを自分のものにするとはいふ彼一流の方法以外に方法といふものをもたなかつた。學者たるべく彼の生活はあまりに苦しく、あまりに多忙だつた。學者であるよりも

藝術家であることが彼の願ひだつた。「私は推理したり比較したりしたくはない。私の仕事は創造することだ。」
「ジェルーサレム」の讀書もこの目的のための手段にすぎなかつたのである。

(一九五〇年十二月六日學會講演要旨)